

三位一体とは、「父なる神」、「子なるキリスト」、「聖霊」という三つの位格が一つであるとする、キリスト教における中心的な教義の一つです。神さまは御子イエス・キリストを通し、聖霊によって自らを啓示し、救いの御業をおこないます。そしてその父・子・聖霊はそれぞれが異なった神ではなく、1つの神だという考え方です。

三位一体であることは聖書には直接記されておらず、後代に発達した考え方であるといえます。しかしパウロは手紙の中で、「主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように」(Ⅱコリント 13 章 13 節)と書いており、初代教会においても、三位一体の元になる考え方があったようです。

ですが3つのものが1つであるということは、なかなか理解できるものではありません。そのため古来より、様々な説明がなされてきました。いくつか紹介したいと思います。

まず「社会的類比」です。これは人間社会の経験から類推するというやり方です。「愛する者」、「愛される者」、「相互愛」という3つのことを、三位一体になぞらえていきます。カパドキアの神学者たちは、この方法で三位一体を説明しようとしてきました。

また西方教会の神学者は、「心理的類比」という方法を用います。人間は記憶、理解、意志という三つの機能を持ちながら人格は一つであることと、三位一体とを結び付けて説明していきます。

いずれにせよ、神さまがどのような形でわたしたちに関わっておられるのか、父なる神と子なるキリストと聖霊とはどう結びついていくのか、説明することなど不可能です。この世にいる間は、神さまのことを本当に理解することなどできないのかもしれませんが。

神さまの元に行くまで、楽しみにしておきましょう。

次回は「死」です。楽しみに。



「至聖三者」

アンドレイ・ルブリョフ

(1360頃～1430年)

主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、あなたがた一同と共にあるように。

(コリントの信徒への手紙二 13 章 13 節)

